

内田樹氏の講演集『日本の覚醒のために』の中に、全国日蓮宗青年会 行学道場で語った「これからの時代に僧侶やお寺が担うべき役割とは」と題する講演が収録されている。お坊さんに語った講演なので、宗教に関わる講演として、興味を惹かれた。

内田氏は深く、鋭い知性と博学な知識を持っているが、身体性を大事なこととしている。身体で受け止めたことが確かなことで、経済的損得とか、頭で考えたことは、時と共に流されると認識している。私も、信仰は身体で体験することだと思っている。

内田氏は神戸女学院で教えていた。ある時、銀行のシンクタンクが入って来て、コンサルティングをした。学舎を見て「この建物は無価値です」とゼロ査定をし、「こんな建物を維持してゆくのはドブに金を捨てるようなものです」と言い切った。学舎はヴォーリズが設計した屈指の傑作で、後に、重要文化財に指定された。銀行のコンサルタントは坪単価とか築年数とかいう金勘定の道具として査定したのである。内田氏は、学舎は美しいだけでなく、中に入ると、空気が清浄で、粒子の肌理が細やかで、心身が鎮まり、調うと言う。靈的に浄化された空間として、身体で感知できる場の必要性を力説している。

人は人間、生と死、世界について思い巡らす。そこには、超越するものと対話し、交わる回路がある。それを靈的と言っている。寺の本堂や教会の礼拝堂で、幾時かを過ごす、平安を体験する。あまりにけばけばしい寺には辟易するし、あまりに巨大で装飾的な教会には「主イエスの福音とは違うだろう」と思ってしまうが、宗教施設で、安らぎを受けるのは誰もが経験することである。

内田氏は現代を、グローバル化した新自由主義経済が説く、儲ければよいという価値観に煽られて、靈的感受性が鈍麻していると批判している。3・11の震災後、多くの若者たちが、都市を離れ、地方に行き、農業やパン屋などをはじめている。人口が減少し、疲弊した町村が、税金をあげるための行政的な人寄せの政策は成功しない。宗教施設が核になっている地域は、靈的な関わりの中で永續している。お坊さん方に、超越的なもの、人間世界の外部と関わる回路を確保することの重要性を訴え、身体センサー感度を高める靈的に整序された空間を作ることを勧めている。私は、キリスト教は永遠の神を問うことで、主イエスにおいて究極と結び合っていることを承認し、その視点から人間と世界の実態を捉えようとする宗教で、そこに、突き放してみる樂觀とユーモアがあるとっている。

講演後の質疑応答で「靈的感度を高める本」を紹介して欲しいという問いに、エマニュエル・レヴィナスの『困難な自由』をあげている。戦後、ユダヤ人の間で、600万人もの人々が殺されたが、神は介入せず、放置した。そのような神をなぜ信じなければならないのかという疑問が出され、ユダヤ教は危機を迎えた。この問いにレヴィナスは答えた。

善行を積み褒美を受け、悪事を働けば罰を与えるような勧善懲悪のロジックで働く神を拝んでいたとすれば、それは幼児の信仰である。人間が人間に対して犯した罪は人間が償う他ない。アウシュビッツは人間が犯した罪であり、その責任は全て人間にある。天上的な介入があって、人間の犯した罪を神が正すという信仰は幼児的であることを認めることである。我々が目指すのは「成人の宗教」である。神の助力なしに地上に正義を実現できるほどに靈的に成熟した人間を創造された。これ以上に神の偉大さを証明する事実があるだろうか、と説いた。レヴィナスの説得によって、ユダヤ人たちはユダヤ教に回帰したという。見えるものではなく、見えない靈的感性を瑞々しく研ぎ澄ませたいものである。